

クリスマスの未明。ホテルのキッチンの朝は早い。時刻的にはまだ夜なのに、仕事的には朝なのもの。

「何だ、これ？」

朝イチでキッチンに足を踏み入れた調理係の下っ端Aは、綺麗に片づいたキッチンにずらりと並ぶパイを見て、眉間に皺を寄せた。

「おはようございまー……何だ、これ？」

彼の後から出勤してきた下っ端Bも、下っ端Aと同様の反応。考え込む二人。その後にも続々と下っ端が出勤してきて、やはり同様の表情。

副料理長が出勤してきた時、下っ端たちは、並んだパイをぐるりと囲んで、全員で困った顔をしていた。

「何ですか、これ？」

代表で下っ端Aが副料理長に尋ねた。

「何だろうねえ？」

副料理長もまた、同様に困った顔。しかし、副料理長なのだから前向きに案を出すこともできる。

「フロントに聞いてみよう。」

「はい！」

というわけで、代表で下っ端Aがフロントに内線電話をかけた。どうやら、本日パーティーで供される料理らしい。昨日のうちに配達員（コング）がやって来て、どこに置けばいいのかわからず、とりあえず料理場に置いていったとのこと。

調理係たちは事態を把握した。本日十時より、なかなか大きな規模のパーティーが催される予定であり、そのピュッフェはこちらで承っている。

「副料理長、これ、ミンスミートパイじゃないですかね。イギリスのクリスマス料理の。」

イギリス料理を専門に学んだ下っ端Bが、パイの匂いをくっかくくんと嗅いで、意見を述べた。専門であるにしては、断言できていないが、まあ、所詮は下っ端だし。「ふむ、言われてみれば、それっぽい匂いがしないでもないな。」

フランス料理専門の副料理長も、下っ端Bに倣って、パイに鼻を寄せた。他の全員もパイの匂いを嗅ぐ。

「ここに置いてあっては我々の仕事の邪魔だ。みんな得手分けしてパイを会場に運び込んでくれ。」

「はい！」

副料理長の指示に、下っ端たちはそれぞれにパイを手を持ち、会場へと向かっていった。

会場の重い扉は、施錠されてはいなかった。先頭に立っていた下っ端Aがその扉を開け、会場の中に足を踏み入れた。その途端。

「ぐわっ！」

彼は前屈みになると、よたよたと数歩前進し、パイを守るようにして、ぱったりと床に倒れた。さすがは下っ端なれども料理人、パイは彼の頭の先で完全に無事だ。

「どうした、A！ うっ！」

下っ端BがAに駆け寄り、またもや倒れた。彼の持っていたパイも無事。

「一体どうしたってんだ、A！ B！ う、うぐわっ！」

以下同様。死屍累々とはこのような状況を言うのだろう。バタバタと倒れた下っ端たち二十余名。床に並ぶパイ二十余个。会場内に充満するは、生物が腐敗と醗酵の狭間で発した臭い。ほとんど腐敗？ 嗅覚鋭敏な料理人には厳しすぎる臭いであった。

キッチンでは、下っ端たちがなかなか戻ってこないため、副料理長がフロントに内線電話をかけていた。様子を見てきてほしい、と。この副料理長、料理長に命令されない限り、腰が重いのである。

そして数分後、フロントの職員たちも、次々と臭いの犠牲となるに至った。それでも無事なパイ。

さらに数分後、フロントに誰もいないのを不審に思ったホテルの裏方職員たちも、続々と臭いの犠牲となった。まだそれでも無事なパイ。

十数分が経過し、副料理長もいよいよ加減、痺れを切らせた。下っ端は誰も戻ってこない、フロントから連絡もない。ホテル内が静まり返っている。彼の重い腰が、仕方なく動いた。——そして、副料理長も悪臭によって倒れた。

嗅覚に障害を持つ職員が出勤してくるまで、この惨劇は続いたのであった。

コングは、キム家の庭に立ち、深い満足感と共に出来

上がったハイデン家のベランダを見上げていた。片手には牛乳、至福の時間である。

ハイデン夫妻は、まだ夢の中。ベッドサイドには、クリスマスの礼拝に行くためのよそ行きが吊るされ、樟脳臭い匂いを放っている。

キムはもちろん爆睡中。時折、足や腕がヒュンッと伸びるのは、エアロビの夢でも見ているのだろう。

エヴェレット氏は、病院のベッドで痛みを耐えかね、何度かナースコールを押してはアーニー君（今夜も当直）をオロオロさせている。

エヴェレット氏を病院に送り込んだフェイスマン、就寝中。

オリバー、もちろん睡眠中。マリアンとキンケイド氏は、ツリーの飾りの修正およびクリスマス・プレゼントのセッティングを終え、やっと床の中へ。

ヤンソン一家も、眠りの中にいた。ヤンソン氏、自分が自転車に二重の料金を払っていることは知らぬままに。

ガブリエラ・コレードは、新生児への三時間ごとの授乳で早くも睡眠不足気味。その他のコレード家は睡眠中。テネシー・ミラー氏は、イブだつつのに修羅場の最中。七次元空間にハウスされたジョッパーズのソウルが、ワイパーズの導きによって再びドグマの力を得る、という構想を編集者にあつまり却下され、クリスタル・スカルの頭頂に穴を開けてジェネシスの力を解放するロンバースに、十六時間の時差を巻き戻して対抗するジョッパーズ、といういさか不本意な内容となる模様。

スタンクとヴォルフ、ロシア料理屋を見つけたものの、コックは既に帰宅後。なので、二人でピロシキを作ってみようと思案中。あとボルシチも。（↑全然お祝い料理じゃない。）

スットコドッコイ親分とマードックは、ジェイソンの部屋でパプシコーラを飲みつつ、飛行機談議に花を咲かせ中。

ジェイソン・ヒックスと、『どうして？』ファンの面々を乗せたバスは、LAに到着しつつあった。

クツワダ氏は、既に起床し、朝の座禅を組んでいる。マスナン氏もまた、無駄に早起き（老人だから）。

ハリウッド・ルーズベルト・ホテルに異臭を叩き込んだハナコ・ヤマダは、そのまま同ホテルにて宿泊中。

そのハナコさんの元カレ、ドワーニ・デモナーレ君は、新しい彼女とクリスマス休暇を満喫中。

デッカー大佐とMPの皆様は、警察の協力を得て、空港への出入り道路に非常線を張り、今度こそAチームを一網打尽にしてやるぞと意気込んでいる。

そして、クリスマスの夜が明ける。

「いやはや、クリスマスですわねえ。」

ジェイソン宅のベランダで、ハンニバルは一人そう呟いた。

クリスマスの夜明けを前にした夜中に遡ると、ロシアン・マフィアの子分二名、ヴォルフとスタングは、徒歩にてヴォルフ宅に到着した。タクシーで連れて行かれたロシア料理店からは、スタングの家よりもヴォルフの家の方が近かった、というだけの理由である。さて、これから二人はロシア料理を作らねばならないのだ。料理なんて全くしたことのない、もっさい男二人で。

ここでヴォルフの家の様子を紹介すると、玄関のドアを開ければ、目の前にはベッド、すぐ右には調理場と呼ぶのもおかし、ガスコンロ一客と小さなシンク、および小型冷蔵庫。その横にはドア開けっ放しのユニットバス。一言で言えば、独身男性向けワンルームマンションだ。バス・トイレ・キッチン共用でないだけでも、豪華なものである。

「……お前、所帯持ちじゃなかったっけ？ ガキもいただろ、二人かそこら。」

スタングが部屋の中を見回して聞いた。

「先月まではな。」

冷蔵庫を開けてウォトカの壘を取り出すヴォルフ。

「……そうか。」

それ以上のことは聞けなかった。

「で、どうする？ ボルシチとピロシキ、作んのか？」

ヴォルフはスタングにベッドに座るよう身振りで示すと、流しの下の開きからカップを探し出して、溜まった埃をフツと吹き、ウォトカを注いでスタングに渡した。

「ああ、済まん。……作ろうにも、作り方知らねえぞ？」

ベッドの端に腰を下ろしたスタングは、受け取ったウォトカを一口飲んだ。空きつ腹にじんわりと沁みる。

「俺も知らん。ボルシチにはビーツとジャガイモとサワークリームと少しの肉が入ってる、っていうのは知ってるが、作り方なんか知るわきゃあねえ。」

壘から直接ウォトカを呷りながら、ヴォルフはベッドの角に腰かけた。

「……てえか、スタング、俺たちが調達しなきゃなんねえの、ボルシチとピロシキじゃなくて、ロシアのクリスマス料理だったような気がするんだが。」

「俺んちじゃ、クリスマスにボルシチとピロシキ食ってたぜ。具のねえボルシチはいつも啜ってたけどよ、クリスマスには芋やら何やらが入ってたんだ。ピロシキなんざ、普段食わせてもらえなくて、クリスマスの特別料理だったな。」

ヴォルフはそれを聞くと、頭をふるふると振り、スタングのカップにウォトカを注ぎ足した。

「そりゃお前んちのローカル・ルールだ。普通は、十二人の使徒を象徴した十二種類の食いもんが入った料理が並ぶんだ。で、そん中にロソリとかあるわけだ。あと、クリスマス前は断食して、クリスマスの朝に断食明けの食事としてハチミツとケシの実が入ったオートミールを食うんだが、ありや人に食わせるようなもんじゃねえしな。」

「へーえ、よく知ってるな。」

「信心深い、厳格な家だったもんでね。」

今度はスタングが、ヴォルフに対して頭をふるふると振って見せた。

「こっち来てからも、そんなクリスマス料理食ってたのか？」

「結婚してからはな。断食はしなかったが。」

「じゃ、元カミさんに作ってもらいたい。作れるんだろ？」

「作れるさ、当然。……だけどな……電話しちゃいけねえし、会うのもダメなんだそうだ。」

「だそうだ、って誰がそんなこと言ってるんだ？」

「奴の弁護士。」

スタングは、もう一度、頭をふるふると振ると、しば

らく何事か考え込むようにして、再度口を開いた。

「……なあ、ヴォルフ、親分の話じゃ、十時に何とか言うホテルの会場でロシア料理を持ってほしいんだよね？」

「ええと、何だっけ、ルーズ、ズール？ いや、ルーズベルト……ハリウッド・ルーズベルト・ホテルか。」

「それだ、多分それ。多少遅刻しても許してもらえるよな？」

「まあ、パーティだって言ってたから、十時ぴったりにロシア料理が必要になるとは思えんな。常識で考えりゃ、昼に間に合えばいいんじゃないか？」

「なら、今焦らなくたってよかねえか？ 十時になりやナターシャも店出してるだろうし、ロシア料理屋だってやってるぜ。それから料理を手に入れたって遅かねえだろ。」

「そうだな、むしろその方が、熱々のボルシチとピロシキを客どもに食わせてやれるぜ。」

結局、ボルシチとピロシキなのかい。

「ピロシキはともかく、ボルシチは熱い方が美味えもんな。」

未だ火傷した上顎が痛いスタングである。恐らく、ヴォルフもそう。

「どうせロシア料理屋に頼むんなら、ナターシャんここに行くこたあねえだろ。ロシア料理屋に全部頼みやあいい。ニシンのロソリ添えと、具がどっさり入ったボルシチと、魚入りのピロシキと——」

「ピロシキにや肉だろ、挽肉！」

「クリスマスには肉食わんぞ。」

それから二人は、ウォトカを飲みながら、ピロシキには何を入れるべきかを語り合い続けた。そして、いつしか二人は狭いベッドで折り重なるようにして眠っていた。目覚まし時計のアラームもセツセツせずには。

クリスマスの朝七時。あまり早い時刻によそ様のお宅を訪問するのも失礼に当たるのだが、ハンニバルは全く遠慮せずにヤンソン家のドアチャイムを押した。その横にはコングが。

ところで残りのAチームメンバーだが、フェイスマン

は寝てます。マードックとストコドコイは、ハンニバルやコングが起き出した午前五時を過ぎてから眠りに就いた。ストコドコイはコングの寝ていたベッドで。まだベッドが生暖かいけど、ロシアン・マフィアの親分は、そんなこと気にしません。

『はい？』

インターホンから聞こえたのは、女性の声だった。ヤンソン・ママだろう。

「ジェイソンの代理の者です。例のブツを持ってまいりました。」

『すぐ行きます。』

戸口に現れた女性、年は行っているけど、金髪美人だが、十中八九、人妻だ。

「ええと、ヤンソンさんのお母様でしょうか？」

飽くまでもにこやかにハンニバルが問う。ヤンソン・ブラザースの長女って可能性も捨て切れななし。

「ええ、そうです。例のアレですか？」

「はい、こちらに。」

ハンニバルは扉を大きく開け、ブルーシートに包まれた不審な塊を見た。

「たーだーし、自転車は盗まれちゃったけどな。」

ブルーシートの後ろで、コングが呟いた。

「それが昨夜、うちの人が変な自転車を手に入れてきてね。あなた方には申し訳ないんですが、盗まれてよかったのかもしれない。」

ヤンソン・ママが、家の中に聞こえないように、ハンニバルの傍まで来て、小声で言った。

「本当に変な自転車で。自動車のタイヤが七つもついていて、サドルがバーのストूलみたいなんですのよ。子供たちがあれが喜ぶかどうか、わかりませんけどね。」

「そいつあ！」

俺たちが作ったもんだぜ、とコングが言いかけたのを、ハンニバルが制した。

「まあ、いいじゃないですか。あたしらは任務を遂行したわけです。」

そんな二人をきょとんとした顔で見るヤンソン・ママに、ハンニバルは笑顔を向けた。

「では、お暇させていただきます。メリー・クリスマス。」

「あ、え、ええ、メリー・クリスマス。」

ブルーシートごと玄関先に置いて踵を返すハンニバルとコング。その後ろ姿に、ヤンソン・ママは「どうもありがとうございました」と、依然として小声でつけ加えた。

クツワダ氏は朝の座禅を終えた。終えた、と言うか、寝不足すぎて、目を閉じたら瞬時に眠りに落ちてしまい、座禅にならないことを覚ったのだ。

「また一つ、悟ってしまった……。」

そう呟くと、彼は熱いシャワーを浴びながら、本日の予定を反芻した。会社はウィンター・ホリデイズに入っただけで休み。しかし、このところ早退が続いたので、明日は休日出勤すべきであろう。これからマンションのみんながミサに行っている間、ジムに行き、一旦戻ってきて着替え、チキンとケーキを買ってパーティー会場へ。パーティーが何時までなのかわからないが、終わった後は片づけに借り出されるだろうから、その後の予定は入れない方が賢明。

シャワーを終えたクツワダ氏は、腰にタオルを巻いた姿のまま、冷蔵庫から「デリシヤス・ウオーター・フロム・ロココ」を取り出すと、ゴッゴッゴッと飲んだ。

「ふう、やはり軟水は美味いな。」

口の端に伝う水を指先で拭い、それをピッと弾くと、彼は鏡に向かった。ペットボトルを持ったまま、一発ポーキング。朝日の中、しなやかな筋肉が、ユキオ・ミシマの世界を彷彿とさせた。ペットボトルは別として。

「こちら、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルのパーティー会場で、五十名近いホテル職員が悪臭に気を失うという事件が発生いたしました。」

午前七時半、ホテルの前に立つレポーターの女性と、さらにその前でカメラを構えるカメラマン。ただし、この二人つきり。道を行く通行人も、それほどこの二人を気にしてはいない。

「悪臭の原因は、パーティー会場に置かれた、各国の醃酵食品だということです。えー、ただ今、その情報が入りました。」

レポーターがカメラマンからメモを受け取る。別に、「ただ今」その情報が入ったわけではなく、レポーターはカメラが回り始める前に醃酵食品の名前をメモっておいたのだが、そのメモをカメラマンに見せて確認を取り、そのまま返してもらったのを忘れていただけなのである。

「悪臭の原因である醃酵食品は、トビウオのクサヤ、シユールストレミング、キビヤック、ホンオ・フェ、以上四点です。いずれも、ひどい悪臭ではあるものの、元々そういう臭いのある食品であるため、保健局も回収できず、放置されています。気を失った職員五十名は、現在は全員、意識を取り戻し、通常業務に就いているということです。」

その時、レポーターの後ろから日本人形がぬぼーっと現れた。ハナコさんである。しかし、カメラマンは驚いた。日本人形が動いているのだから。画面がビクッと動く。カメラマンの反応を見て何事かと振り返ったレポーターは、「ギャッ！」と叫んで、その場にヘナヘナと座り込んだ。

「精神力が足りないからよ。」

それだけ言うと、ハナコさんは滑るようにホテルの中に姿を消した。

ハナコ・ヤマダは、早くに目が覚めてしまった。寝ても覚めても、あのお方（マードック）の姿が脳裏に浮かんでしまうからだ。久々の大興奮。これで血圧が高ければ鼻血の一筋でも出ようものだが、ハナコさんはうら若き日本女性によくあるように、血圧が低かった。しかし、興奮しているおかげで、目が覚めてから一時間も経たないうちに、ベッドから出て歩き回れる状態になった。これは彼女にとって非常に稀な事態である。

そんなわけで、彼女は散歩をしていたのだ。「今、あの方は何をしていたらっしゃるのかしら」とか「バジャマの柄は何かしら」とか「朝ご飯には何を召し上げるのかしら」とか考えながら。

散歩に出ようとした時、ホテル職員気絶事件のことを耳にした。さらに、原因が何であるかも耳にした。「そんなものを一体誰が持ち込んだんだ」という非難の声も

耳にした。なので、ハナコさんは一気に不機嫌になっていた。

やはり一人楽しく空想に耽るのが一番、と、ホテルの部屋に戻っていくハナコであった。

マンションの中庭には、三々五々、人が集まり始めていた。

ミス・アントワネットは、ピンクのスーツ姿だ。同じピンクの小さな帽子を被り、帽子から垂れたレースで頭全体をふんわりと包んで、お上品な感じ。足元もキリリと五センチヒールだし、何だか普段より十歳くらい若返っている。

そんなマドモアゼルをうつとりと見つめるマスナン爺さん。アイビー調のスーツがレトロで、ある意味お洒落な感じさえ受ける。

そこに合流したのは、ハイデンさん夫妻。こちらも地味だが仕立てのよいスーツ姿で、だいぶしゃっきりなさっている。ベランダも完成したし、思い残すことなく迎えたクリスマス朝であろう。

慌しくやってきたのはヤンソン一家。子供たちは走り回るでもなく、両親の後ろに静かに一列に並んでいる。

中庭に静かに滑り込む一台のバス。マンションの方々は待ってましたとばかりにぞろぞろとバスに乗り込んだ。実はこのバス、教会行きなのだ。クリスマス・ミサのために近所の教会が遣わしている無料バス。車窓からは、既にビックアップされてきた近所の方々が笑顔で手を振っている。アントワネットさん、マスナンさん、ハイデン夫妻、そして子沢山のヤンソン一家も、口々に「メリー・クリスマス」を言いながらバスに乗り込んでいく。そしてバスは走り去った。

バスが去るのと同じタイミングで庭に出てきたのは、キムである。黄色のロングドレスにラビットファーのベストという出で立ちは、がっしりした肩幅と相俟って、フォーマルではあるが、どこかオカマのマタギ風である。

そして次に出てきたのはオリバーとユリア。半ズボンに蝶ネクタイという格好のオリバーと、赤いスモック・ドレスに白のチーフというスペイン風の衣装に身を包んだユリアは、そこはかとなくお似合い。マリアンとキ

ンケイド氏は、プレッピー風のブレザー姿。コレード一家も、赤いセーターをお揃いにしたおめかし着である。二家族＋キムは、それぞれの車（コレード家はもちろんタクシー）に乗り込み、これまた自分たちの教会を目指した。

ほどなくして、誰もいなくなった中庭に滑り込む一台の車。あからさまに剣呑な空気を纏ったミリタリーな車体から降りてきたのは、いかつい制服の男二名。デッカー大佐の部下、XとYである。厳しい検問の結果、この界限でのコンゲのパンの目撃情報を掴んで聞き込みにやって来たのだ。

二人は、徹夜明けの眩しそうな顔でマンションを見上げた。高級リゾート・マンション。テンプルトン・ベックの好みそうな物件である。

「臭いな。」

「ああ。」

二人は、ゆつくりと中央の階段に向かって歩を進めていった。

その時、あたふたと出てきたのは、こちらも徹夜明けのミラーさんである。

「君、この住人か？」

当たり前じゃないか、ここから出てきたんだから。ミラーは、働きすぎで動かない頭でそう考えた。

「こういう奴らを見なかったかな？」

部下Xが、一枚の写真をミラー氏に見せた。それは、どう見ても十年以上前のハンニバルの写真。明らかに腹は凹んでいるし、髪は多いし、引き締まった表情をしている。なぜそんな写真？

「ん」と。

ミラー氏は、渡された写真に顔を近づけた。よく見えない。なぜなら、眼鏡を外しているから。そして、元々人の顔を見て話さない癖がある上、人の顔を覚えるのは大の苦手だから。

「見たことないです。」

「本当か？」

「うん。全然見たことないです。」

ミラー氏は、そう言って写真を突き返した。いくら記

憶の薄いミラー氏でも、何か目立つ行動なり言動なりがある人なら覚えられるのだが、今回ハンニバル、少々影が薄かった模様。

「じゃあ、こいつは？」

と、部下Yが差し出したのは、コンゲの後ろ姿の写真が載った新聞。

「知りません。」

即答するミラー氏。後ろ姿で人を判別するなどという高等技術はお持ちでない彼氏である。

「それにここ、住民しかいませんよ。賃貸じゃないし。」
「そうか。じゃあ怪しい奴を見かけたらここに電話してくれ。」

部下Xは、そう言って電話番号メモをミラー氏に差し出した。

「ええと、怪しい人の中には、あんたたちも含めていない？」

「もちろんダメだ。」

デッカーの部下たちは、そう答えると、車に乗り込んだ。助手席の部下Yが、手帳に「A-14地区に該当なし」と書き込む。部下Xは、ミラー氏に「ご協力どうも！」と声をかけると、アクセルを踏み込んだ。

「どうも。」

愛想よく答えたミラー氏は、自分が何をしに出てきたのかすっかり忘れていることに気づき、いやはや、と頭を掻きつつ部屋に戻っていった。

九人のヤンソン・ブラザース（男七人、女二人）は、物静かなおとなしい子ばかり、というわけではない。中には、オリバーと取っ組み合いの喧嘩をする子もいるぐらいだ。だが、それがなぜ今朝に限って静かだったかを話さねばならない。

彼らは、親が九人もの子供たちに九個のまともなクリスマス・プレゼントを用意できるとは、最初から思っていないかった。と言うか、未だかつてまともなクリスマス・プレゼントを貰ったことはなかったから、クリスマス・プレゼントというのはまともなものではあり得ないのだ、と信じていた。それに加えて、彼らは、彼らの父親が変な自転車愛好家だということも承知していた。そ

して、彼らも彼らの母親も、父親がウキウキと手に入れたくる自転車に変なものであり、そんなものに乗るのは一生の恥であり、そんなものを人目につく場所に置くことさえ控えていた。なので、彼らの家は、ただでさえ十一人家族で狭苦しいというのに、さらに変な自転車まで屋内に収納しておかなければならず、非常に狭苦しかった。

今年のクリスマスも、まともなものはないだろうと思ってた。でも、もしかしたら、という気持ちも、やはり子供なので持つてはいた。微かな希望を持つて起きてきたクリスマスの朝。案の定、リビングには変な自転車があった。ここで子供たち全員のテンションはかなり下がった。百あるうちの五十が普通のテンションだとすると、九人平均三・六といったところだ。せっかく今年にはクリスマス前から「自転車が欲しいなあ」と、事あるごとに言っていたのに。「変な自転車」ではなく「普通の」自転車」が。それも、今年のクリスマス・プレゼントの変な自転車は、今までになく変だ。

子供たちのテンションは、オープンの中で膨らんでいったスフレがオープンの外に出した途端に萎んでいくのと同じように平均三・六になっていたのに、父親の得意そうな顔したら。まあ、これはいつものことなので気にしないが。

そして朝食。ハチミツとケシの実が入ったオートミール。どうやらヤンソン家は、北欧の慣習とアメリカの文化のちゃんぽんで生きているようだ。このオートミールがまた不味い。何も入っていないオートミールよりはマシであるが、生温かく薄ら甘いネチヨネチヨの糊の中に、ケシの実のツブツブがあっても、ほとんど意味がない。一番下のヤンソン・ジュニアは、今年、ハチミツを食べられる年になったので、彼にとつては初めてのハチミツとケシの実入りオートミールだ。黙ってオートミールを食べる兄妹に倣って、彼もスプーンを口に運び、そして泣き出した。大泣きではなく、しくしくと。幼い子供の泣き方ではない。心の中にある様々な思いが、彼をそうさせたのだろう。

そんな折、誰かが訪ねてきた。対応に出た母親が戻ってきて、「表にプレゼントがあるわよ」と言った。まだ

オートミールは食べかけだったが、これはオートミールを放棄するいいチャンスである。九人で目配せし、みんなで席を立ち、玄関の外に出た。ブルーシートを剥ぎ取ると……そこにはガラクタと虐待された犬が。

そう、犬がいたのだ、生きた犬が。ケージに入つて、ケージの中は糞尿だらけ。その上、床に倒れたまま、浅く呼吸をしているだけの状態だ。それもそのはず、この犬、四日は水も餌も与えられない。ヤンソン・ブラザースの年長者たちは、「この犬、死にそうだ」と判断した。長男が水を汲みに屋内に戻り、長女が自分のオートミールを取りに戻った。そして、犬は水とオートミールを口にするのができた。水をベルベルと飲み、カプカプとオートミールを食べる犬を見て、他のヤンソン・ジュニアズもオートミールを持つてきた。だいが沢山のオートミールを食べ、犬はようやく立ち上がった。ホッと息をつくヤンソンズ。年長ヤンソンズは、「ミサから戻ってきたら、犬を洗ってやらなきゃな。あと、ケージも」と溜息もついた。年少ヤンソンズは、「犬の名前はなにしようか」と考えていた。

母親に身支度をするように言われたので、彼らのうち四人は犬をケージごと庭に運び、残り五人はガラクタをリビングに運んだ。残されたブルーシートは、海からの風に吹かれて、どこかに飛んでいってしまった。

というわけで、彼ら九人は、テンション激低に加えて、犬のことで疲れていた。手を洗って、身支度を終えた後、彼らには騒ぐ元氣も残っていなかったのだ。

教会へ向かうバスの中、そんなぐつたりとした子供たちを見て、ヤンソン・ママはWTFPには子供たちは連れていかない方がいいだろう、と判断した。ステキなクリスマス・プレゼントの玩具も沢山あるし（誤解）、犬と遊んでいればいいだろう、と。彼女にとつては、久しぶりに結構心穏やかなクリスマスだ。ヤンソン・パパがあの変な自転車にいくら払ったのかを知った時には、激怒すると思うけど。

因みに、ヤンソン・ママがマリアンから連絡を受けて、急遽、大量に作ったスウェーデンのクリスマス料理の名は「ヤンソンさんの誘惑」――茹でたジャガイモと炒めたタマネギにアンチョビを乗せ、生クリームと牛乳のソ

ースをかけてオーブンで焼いた料理である。何皿も何皿も夜を徹してオーブンで焼いていたので、実はヤンソン・ママも子供たち同様にお疲れ。一人だけ陽気で元気なヤンソン・パパに冷たい視線を向けるのみ。

子供と妻から冷たい視線を受けていることにも気づかず、ヤンソン・パパは飽くまでも陽気に元気に、バス内の方々とお喋りを続けているのであった。

クツワダ氏が自転車（スポーツタイプ。当時マウンテンバイクなんて洒落たものはなかった）に乗ってジムから戻ってきた時、隣の家に人の気配があった。この時間、今からミサに行っていたのでは、十時からのパーティに間に合うわけがない。

『ミサに行くの、やめたのかな……？』

念のため、クツワダ氏はミラー宅のドアチャイムを押した。

『はい？』

もしかしたら空き巣が入ったのかとも思ったが、そうではなかった。ミラーの声だ。

「クツワダだが、君、ミサには行かないのかい？」

『……そうだった！ ミサだ！……ああ、もう遅いですよね？』

「多分な。」

少しの間を置いて、ミラーがドアを開けた。別に用があるわけではないが、何となく、クツワダ氏はミラー宅に入っていた。

ミラー氏は、出かける気ではいたのか、スラックスに白いシャツ、レジメンタル・タイを締めて、Vネックのセーターを着ていた。普段はジーンズとTシャツにスウェットシャツという服装なのだが。

「済みませんが、僕の眼鏡、探してもらえませんか？ 見当たらなくて。」

言われてみれば、ミラーは眼鏡をかけていなかった。クツワダ氏も眼鏡の民であるが、彼は眼鏡を行方不明にしたりしない。眼鏡を外した時にどこに眼鏡を置いたかは必ず覚えているし、できるだけ同じ場所に置くようにしている。

「普段はどこに置いてるんだい？」

「眼鏡を外すのなんて、寝る時とシャワーの時ぐらいだから、サイドテーブルか洗面台の上のところです。」

「そこにはなかった？」

「あったら今、困ってません。」

クツワダはリビングをざっと見て、キッチンをぐるりと見て、洗面所を見た。眼鏡つばいものは見当たらない。「寝室、いいかな？」

「どうぞ。」

寝室に入り、電気を点ける。ミラーの言う通り、ベッド脇のテーブルに眼鏡はない。あるのはチョコバーとコミックスぐらいだ。

「クローゼット、開けてもいいかい？」

「どうぞ。」

クローゼットを開け、中を見る。そこでクツワダ氏はフツと笑った。

「あったよ。」

クローゼットの扉に据えつけてあるネクタイ・ハンガーに、それは引つかかっていた。それを取って、ミラーに渡す。

「大方、セーターを被る時に眼鏡を外して、ここにかけてたんじゃないかな？」

眼鏡を装着したミラーは、クツワダ氏がトントンと差し出すネクタイ・ハンガーを見て、「そうかもしれないですね」と恥ずかしそうに呟いた。

「で、君は眼鏡が見つからなくてミサに行きそびれたわけか。」

寝室を出て、リビングに戻りながらクツワダ氏が言う。

「いいえ、ミサに行くってこと自体、忘れてました。今日が二十五日だってことは覚えてたんですけどね。昨夜、あの後、ぼつたりとベッドに倒れ込んだのに、締切間際だっていうのを思い出して、朝までずっと下絵描いてました。」

「あれ？ 昨日、君、入稿してきたばかりだと言っ

なかったっけ？」

「ええと、それはですね、僕、だいぶ締切を破ってまして、昨日入稿したのは二十日締切だったやつで、今描いてるのは二十七日締切のやつです。描くの二日はかかるから。」

「二十七日？ ウィンター・ホリデイじゃないのかい？」

「弱小出版業に祝日はありません。」

きつと今頃、印刷所は写植を貼り終えたミラー君のマンガを印刷していることでしょう。

「ところで、それはパーティ用の服装かい？」

クツワダ氏は完璧な正装（午前からのパーティなのでモーニング）を着るつもりでいたのだが、ミラー氏がこの程度の軽装なら、自分もその程度でいいかと思っ

て尋ねた。

「いえ、ミサに行くつもりだったんで。」

「行くのを忘れたんじゃ？」

「ミサに行こうと思って着替えて、家を出たところで誰かが来て、何か尋ねられて、それに答えているうちに、ミサに行こうとしていたことを忘れてしまったんです。で、その時、眼鏡がないことに気づいて。」

話しながらも、ミラー氏はカメラに餌をやっていた。

「そ……そうだったのか。それは……何と言うか……。」

本当に、何と言えはいいのかわからないクツワダ氏。「馬鹿だな」とか「間抜けだな」とか「鳥頭だな」などと言っている仲じゃなし。

「いや、別にミサにはいつも行っていないし、いいんですよ。眼鏡が見つかっただけでも、よしとします。ありがとうございました。」

ミラーは、クツワダ氏の方を振り返って、しかし依然として片手にカメラの餌（乾燥イトミミズ）を持ったまま笑顔を見せ、言葉を続けた。

「パーティは十時からですよ。九時四十五分に車で出れば間に合いますね。」

「私はチキンとケーキを買わなきゃならないから、そろそろ着替えをして出ないとな。」

「じゃあ、九時半と一緒に車で出ましょうか。クツワダさん、車ないんですよう？」

「確かに、自転車でパーティ会場に乗りつけるっていうのは変だな。それじゃあ便乗させてもらうよ。」

そんな感じで、どんどんとお友達化していく二人であった。

クリスマスの朝。

久しぶりに雁首揃えたAチームの面々は、四日振りの洗濯物はためく室内で、朝食の席に着いていた。

「はい、最初の人、目玉焼き五個。」

台所でフェイスマンが叫んだ。

「俺だ。」

コングが席を立ち、目玉焼き犂き合う皿を受け取り席に戻る。

「次、白身だけ四個のオムレツ、イチゴジャム添え。」

「それ、あたしの。」

ハンニバルがイソイソと皿を受け取る。

「俺の薄焼き卵は？」

と、マードック。

「作ったけど、薄焼き卵って俺わかんないから、とりあえず薄く焼いてみたけど、それでいい？」

「んーと、それ細切りにして。」

「細切りね。」

「で、ビネガーで和えたライスに乗つけて。」

それは卵料理と言うより、ジャパニーズ・チラシでは。そこそこに見え隠れするクツワダ氏の影響。フェイスマンは、手早く卵を細切にすると、冷凍してあったライスをマイクロウェーブ・オーブンで解凍し、ワインビネガーをかけて手早く混ぜた。そこに山盛りの細切り卵と、ついでにオリーブも散らして、マードックへ。自分には目玉焼きを二個作ると、食卓に着いた。

「じゃあ、それぞれの依頼の報告会と行きましょうかね。まずコング。」

と、ハンニバルが言った。

「おう。」

目玉焼きを丸一個ずつ豪快に平らげていたコングが、赤ペンとマーカーだらけの依頼書を捲る。

「俺の方は全部終了だ。ベランダもできたしな。」

「よし、モンキー。」

「オイラも終了。クツワダさんとの禅問答は、まだ途中っちゃ途中だけど、あれ、どこが終わりかわかんないし。」

「その辺は有耶無耶にしておけ。フェイスは？」

「ええと、俺の方も大方終わってるみたい。エヴェレッ

トさんとの依頼が終わったかどうかは微妙だけど。」
「ふむ。まあ、それは彼氏が退院してくるまでは保留でいいだろう。で、あたしの方も終わったし、じゃあ、ジェイソンの代わりの仕事はこれで終了ってことだな。」
それぞれの卵料理を食いながら同意する三人。

ハンニバルは、そんな三人の部下を見やり、満足げに頷いた。

「何だか慌しいクリスマス休暇でしたね。」

既に過去形で語るハンニバル。これからがクリスマス本番であることは、その時のハンニバルには忘却の彼方であった。

その頃、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルにほど近い教会では、クリスマスの説教が行われていた。

「……というわけで、神は常に私たちと共にあります。クリスマスとは、神が私たちのために、大切な一人子を遣わして下さった日なのです。私たちは、一人の人生を歩んでいるわけではありません。神の御心は、イエス・キリストの犠牲を得て、常に私たちと共にあります。そのことを忘れないようにして、また健やかな一年を過ごすではありませんか。アーメン。」

牧師は、厳かな口調でそう締め括ると、静かに壇上を下りた。神妙に説教を聴いていた信者は、ミサの終わりに満足げに立ち上がり、口々に暮れの挨拶を交わしながら帰り支度をしている。

と、その時、黄色いドレスのマタギが一人、つかつかと壇上に進み出た。キムである。キムは、がしつとマイクを握むと、帰ろうとする人々に向けて叫んだ。

「ちょっと待って！」

何事かと振り返る人々。

「座って！ 座って！ 帰らないで！」

キムはそう叫ぶと、一冊の本を取り出した。『どうして？』である。帰りかけていた人々は、キムの迫力に押されて再度腰を下ろした。

「皆さん、例年なら、このクリスマス・ミサで一年のイベントは終了ですが、今年は、も一つスペシャル・イベントがあります。この後、十時からハリウッド・ルーズベルト・ホテルで、ジェイソン・ヒックス作の『どうして？』の主人公の友達、テンピーを歓迎する、ウェルカム・テンピー・パーティを催します。もちろん、ジェイソンも出席よ。あの感動の名作『どうして？』の主人公二人が、遂に私たちの前に揃って姿を現すの！ え？ 『どうして？』を知らない？ あなた、モグリね！ いいわ、知らない人のために、私がここで『どうして？』を暗唱してあげる！ 一字一句間違ひなく覚えてるもの！ いい？ 号泣させちゃうかもしれないから、みんなハンケチを用意してね！」

そう言うとき、キムは目を閉じた。何度が深呼吸し、静かに『どうして？』の詠唱を始めた。

「テンピーは僕の友達。僕の『どうして？』に答えてくれる。たまに答えてくれない時もある。あ、でも『僕』ってこれジェイソンなんだけど、彼はマリアンじゃないから、答えてもらえなくても棒でぶつたりはしないの。偉いわね。ええと、どうしてテンピーは僕の友達なの？ 誰も僕たちと友達になろうとしないからさ。……これって孤児差別よね。私がその場にいたら、そんな奴ぶつ飛ばしてやるのに。マリアンなら棒でぶつね。どうして誰も僕たちと友達になろうとしないの？ 僕たちが仲良しだからさ。ステキね。誰も二人の間には割り込めないのよ。(中略) テンピーは僕に『テンピー』と呼ばれるのが嫌みたい。僕がテンピーを『テンピー』と呼ぶと、テンピーは僕をぶつ。そうね、虫の居所が悪い時って誰にでもあるものね。でも、ぶたないときもあるみたいね、その辺はマリアンと違って人間ができてるわよね、テンピー。(後略)」

クリスマス・ミサに来た人々、的外れな解説つきの詠唱に、最初こそ「何だこの人は」という目でキムを見ていたが、物語が進むにつれ、段々とその内容に心惹かれたのか、それともキムの迫力に圧倒されたのか、ジェイソンによる解説まで諳んじ終わった時、会場は拍手の嵐に包まれたのであった。

スットコドッコイはコングのベッドで目覚めた後、Aチームに朝食に誘われたが、部下のことが気になるので、誘いを辞退して自分の家に戻った。途中までは徒歩で、それからはバスで。

事務所兼自宅の雑居ビルの階段を昇り、辺りを見回す。時として不審者がいるのだ。スットコドッコイの命を狙っていたり、スットコドッコイの部下の座を狙っていたり。後者は有能な者なら願ったりなのだが、前者はあまりありがたくない。しかしまあ、クリスマスの朝だということもあり、事務所の周りは静かなものだった。誰かが潜んでいる気配もなければ、事務所に誰かがいる気配もない。

鍵を開け、彼は事務所に足を踏み入れた。電気を点ける。雑然とした部屋はアブダビに旅立つ前と変わりなく、やっと「家に帰った」という気持ちになった。自分の本当の家はロシアにあるのだと、日頃から周囲に言っているのに、ここを自分の「家」と思うなんて、と、スットコドッコイは少し口角を上げた。

時計を見て、受話器を取る。祖母が元気でいるか、声を聞きたくなって。国際電話に出た祖母は、「これから寝るところだった」と不機嫌そうにしながらも、まだ何とか元気そうな声をしていった。「近いうちにボルシチ食べに帰るからね」と言って、スットコドッコイは電話を切った。

それから、スタングの家に電話をする。何度コールしても、スタングは出なかった。ヴォルフの家にも電話をした。ちょうど、電話は使用中だったようなので、スットコドッコイは電話を切った。

スタングは出かけている。ヴォルフは家で電話している。二人とも、きつとロシア料理の手配が何かで忙しくしているのだろう。スットコドッコイはそう思い、ロシア料理のことは部下に任せることにした。二人がロシア料理を手配できそうもなければ、自分が動かなきゃ、と思っただけなのだ。

「スタングもヴォルフも、少しはやるようになったんだなあ。」

社長用の椅子にゆったりと座って、スットコドッコイは誰もいない事務所の中、独り呟いた。

しかし、スタングは紛れもなく外出中だったが、ヴォルフは電話中なんかじゃなかった。二人はヴォルフの家でガーガー寝ていた。床に置いてあった電話は、スタン

グによって蹴飛ばされ、引っ繰り返って受話器が外れていた。

刻々とパーティの時間は迫っているというのに、二人に起きる気配はない。どうする、ロシアン・マフィア(特に親分)！ マードックが密かにロシア料理を期待しているぞ！

予定通りなら朝にはロサンゼルス国際空港近くの深夜バス専用バス停に到着するはずのバスは、LAエリアに入った途端、車両故障を起こした。運転手の話では、恐らくギアが外れたのではないかと、ということなのだが、原因はこの際どうでもよく、乗客一同は何が何でも十時にWTPP会場に到着していなければならないのだ。代わりのバスを呼んだ、と運転手は言ったが、それがいつ来るのか、はっきり言っていない。となれば、もうあとわずかな距離なのだから(と言っても、徒歩で行ける距離じゃない)、代わりのバスを待つよりも、タクシーや路線バスで行った方がいいんじゃないか、という意見が出た。酔っ払いの乗客一同の中から。酔っ払いというものは、おおよそ勢いのみで行動するので、その意見に反対する者は運転手しかいなかった。そして、酔っ払いというものは、酔っ払っていない者の意見に耳を傾けないのであった。

というわけで、WTPP参加者は深夜バスを降り、銘々に荷物を持って、車道をのしと、いや、てれてれと千鳥足で歩いていった。彼らは、ちょっと歩けばタクシーが拾える、もしくは、路線バスのバス停があつて、すぐにバスが来る、と信じ込んでいた。

だが、現実はその甘くないものではない。タクシーは通るのだが、空車のタクシーは通らない。路線バスのバス停までは、かなり遠かった上、来たバスは満員で、一人が乗り込む余地すらなかった。

タクシーの乗客、それから路線バスの乗客、彼らは皆、WTPP参加希望者であることに、酔っ払い一同はこの時点では気がついていなかった。そして多分、万が一パーティ会場に到着した後でさえ、そのことには気がつかないだろう。

プロテストの信者たちを、加えて『どうして?』信者にもしたキムを先頭に、キンケイド一家その他プロテストの皆さんは、WTPP会場までの道を行進していた。気分はバレードだが、賑やかな要素はまるでない。

その一方で、カトリックの信者たちを、加えて『どうして?』信者にもしたマドモアゼル・アントワネットもまた、彼女が先頭に立ち、信者たちをWTPP会場に導いていた。

クツワダさんも無事にチキンとケーキを購入し、ミラー氏運転のクーペに乗って、WTPP会場に乗りつけた。

ハナコ嬢も、もちろん会場の前のロビーで待っていた。スットコドッコイも、その後シャワーを浴びて、モニングに着替え、七五三のようだ。キョロキョロと辺りを見回すも、部下が見当たらない。

そして午前九時五十分、WTPPを目前に会場に集った人々は途方もない人数で、マスコミの方々も大勢いらつしやっている。

ここでマリアンは愕然とするしかなかった。なぜなら、主役がないのだ。朝にはLAに戻ってきているはずのジェイソンもいなければ、テンピー(と思われているフエイスマン)もない。

「キム、ジェイソンとテンピーは?」

マリアンは、テーブルの上に並んだ料理に早々と手をつけているキムを見つけて出して尋ねた。

「忘れてた!」

余興のエアロビ・ダンスのことで頭が一杯だったキムは、手からミンスミートパイをぼとりと落とした。

「ジェイソンは知らないけど、テンピー連れてこなきゃ!」

慌てて会場を後にするキム。マリアンは壁にかかった時計を見上げ、溜息をついた。

それより少し前、特にすることもなく、リビングでテレビを見たり、部屋の片づけをしたり、ダンベルを上げ下げしたり、絵本を再読したりしていたAチームの面々は、これこそクリスマス休暇といった時間を過ごしてい

た。と、その時、はっと顔を上げるマードック。

「今日、十時からパーティじゃない!」

「何だ、そのパーティってのは? クリスマスパーティか?」

実は結構パーティ好きのハンニバルが尋ねる。だって彼、自称「俳優」だし、俳優って言ったらパーティには出席するもんだし。

「ああ、そう言えば、キムたちが何か頑張ってたよね。ハリウッド・ルーズベルト・ホテルでさ。」

フエイスマンの疲れ切った脳味噌から、ちよつと恥ずかしい自分の写真(多数)については、都合よく排除されていた。でも、それは決して「都合よく」ではないのだ。

「そんなもんに出るつもりか?」

コングは決してパーティが好きではない。彼の性格からすれば当然だ。

「ふむ、そろそろ支度して行かんとな。フェイス、パーティ用の服を用意してくれ。」

リーダーの号令一下、部下三名は銘々の作業に取りかかった。

「Aチームの作業テーマ曲、かかる。」

ひとつ走り服を調達してくるフエイスマン。ハンニバルの腹にコルセットを巻き、紐を思い切り引っ張るコング。鏡に向かい、髪を櫛梳るマードック。

「Aチームの作業テーマ曲、終わる。」

あつと言う間に、パーティ仕様のAチームが完成。色取り取りのスーツ姿(モニング四着は入手できませんでした)。ぱつと見、人数の少ないドリフ。

「いざ出陣!」

葉巻を銜えたハンニバルを先頭に、一同はぞろぞろと駐車場に向かった。

そして、紺色のバンが駐車場を出ていった数分後、キムの車が駐車場に滑り込んできた。

乱暴に車を降りたキムは、マンションの階段を三步で駆け上がり、ジェイソンの部屋へと躍り込んだ。(フエイスマン、鍵を忘れたいらしい。)

「ちよつと、もうパーティ始まるじゃか……あれ?」

つんのめって飛び込んだ先は、裳抜けのカラである。「まったく、どこ行つたのよ！ 隠れてないで出てきなさいよ！」

そう言いながら各部屋のドアをバンバン開けて回るキムが目にしたものは、綺麗にベッドメイクされたベッドと、片づいた台所。キムは愕然とした。

「夜逃げ？……なわけないわよね。もしかして、仕事が終わったから帰っちゃったのかしら？ そう言えば、元々この辺の人たちじゃなさそうだったし。……大変、探さなきゃ！」

キムは階段を二歩で飛び下りると、車に乗り込み、怒涛の勢いでいずこかへ去っていった。

さて、こちらWTPP会場。既に開場時間を迎えている。しかしジェイソンは来ないし、テンピーもいない。マリアンは頭を抱えた。このままパーティーをスタートしたのでは、何の会なのか不明になってしまう。かと言って、開場を取り囲む大勢の人を表で待たせたままにしとくわけにも行かない。

「仕方ないわね、開場しましょう。」

マリアンは、ホテル職員にそう言うのと、開場の扉を開けた。

「臭っ！」

思わず叫ぶマリアン。そりゃ、一所懸命換気したって、各国発酵食品の臭いはそう簡単に消えるもんじゃないよね。

マリアンは、曲がりそうな鼻を摘みながら、ホテルの玄関に向かって叫んだ。

「皆さん、WTPP、オープンよ！」

待ちかねた群衆が、開場に吸い込まれていく。口々に「臭い」とか「何だこの臭い」とか言いながら。

ロビーで待機していた人々全員が会場の中に入ったのを確認してから、マリアンはステージ右端のスタンドマイクを取った。

「皆様、大変らくお待たせして申し訳ございませんでした。」

談笑をしていた人々が口を閉じ、マリアンの方に顔を向ける。

「はじめまして、パーティー主催者のマリアン・キンケイドです。」

素直に拍手が贈られる。

「国内各地はもちろん世界各国から、『どうして？』の熱烈なファンである皆様がこんなに大勢参加して下さい、受付開始時点でもとても驚いたと共に、本当に嬉しく思いました。今はその皆様の前にこうして立ち、ただただ嬉しく思います。急ぎの連絡であったにもかかわらず、ご出席下さった皆様、誠にどうもありがとうございます。」

「どうしたしまして！ パーティを開催してくれてありがとうございます！」

どこからともなく声が上がリ、マリアンは胸の辺りがキューツとして、目頭から涙が湧き出てきた。

本当のことを正直に言ってしまうと、マリアンは考えた。万が一、ジェイソンとテンピーが最後の最後まで現れなくても、ここにいるにこやかな顔をした人々は、みんな許してくれるだろう。『どうして？』のファンは、みんないい人たちだ。

「みんな、どうもありがとう。ホント嬉しいわ。グスッ。」

よそ行きの言葉が崩れたのにも気づかず、マリアンはハンケチで涙を押さえた。

「涙は大事な時まで取とかなきゃね。でも、ごめんなさい、パーティーの主役であるジェイソンとテンピーが、まだ到着してないの。ジェイソン、この間までNYにいて、このパーティーに間に合うように帰ってくるって言ってたんだけど、ちよっと遅れてるみたい。昨日のハイジャック事件のせいかもしれないわ。」

会場内が、「心配ね」とか「大丈夫かしら」という声で少しざわつく。しかし、それだけで、暴動が起きたりする様子もなく、マリアンを責める声も出ない。やはり、いい人たちだ。

「そうそう、『どうして？』とは関係ないけど、少し我慢をさせてもらっていいかしら？」

返事を待たず、話し続けるマリアン。

「ブライアン、こっちにきて。」

と、オリバーと一緒にいたブライアンを手招きする。

「私の夫、ブライアン・キンケイドです。普段はアブダ

ビの某石油会社に勤めているサラリーマンなんですけど、実はこの人、昨日のハイジャック事件でハイジャック犯を捕まえて、ジェット機を無事に着陸させた英雄なんです。」

場内がどよめいた。マリアンの写真を撮っていたマスコミが、一斉にカメラをブライアンに向ける。多に照れる英雄。撮影が一段落してから、マリアンは背を伸ばしてマイクに口を近づけた。

「話が長くなって横道に逸れてしまったけど……これよりウェルカム・テンピー・パーティーを開催します！」

今までで一番大きな拍手が上がった。

「ホテルのビュッフェと、あとそれから各国のクリスマス料理が準備してあります。ジェイソンとテンピーが現れるまで、皆さん、ご自由にお召し上がり下さい。」

そう言ってマイクのスイッチを切ると、マリアンはふうっと息をつき、ステージを下りた。

ロビーで新生児をあやすガブリエラにつき添うフリオとユリア。マリアンの開会の辞は聞き損ねてしまったけど、幸せ一杯のコレード一家だった。ユリアの「クリスマスと一緒にいてくれる人を募集中」という依頼どころか、「できれば家族揃ってクリスマスを過ごしたい」という願いまで叶ってしまったのだから。フリオの依頼も、タクシーにはカーナビまでついて返却され、素人にしては上出来な儲けが「売り上げ袋」の中に入っていた。

「あ、あの人たち……。」

ロビーに入ってくる男四名に目を留めて、ユリアがスペイン語で言った。

「ジェイソンの代理の人たちだ。おい！」

と手を振るフリオ。ハンニバルに駆け寄り、その手をぎゅっと握る。

「あなたのおかげで、うちの一家全員、幸せだ。ありがとう。」

「どうもありがとう、おじさん。」

ユリアも礼を言う。ガブリエラも、ソファに座ったまままだが、礼を言った。赤子も「アー」と手を伸ばす。

「いやいや、礼には及ばんよ。」

コレード一家の笑顔がAチームにも移り、四人は満面

の笑顔で会場へのドアを開けた。

会場内は、四人が想像していた以上の賑わいだった。
「おお、こりやなかなかのパーティですね。」
「お前、こりやなかなかのパーティですね。」

壁面に飾られた写真を再度目の当たりにし、すべてを思い出し、「来てはいけない場所だったかも」と思うに至った。

そこに登場、ハナコさん。会場内にあのお方（マードック）の姿が見えないとわかるや否や、出入口のドア脇に陣取っていたのだ。マードック（グリーンのスーツ姿）を見つめるなり、彼の前に進み出て、深々とお辞儀をする。それに対し、マードックもお辞儀を返す。

そんな二人に生温かい目を向け、残り三名は会場の奥に進んでいった。

しかし、コングがソフトドリンク・カウンターに牛乳を発見し、戦線離脱。因みに、普通はウイスキーの水割りやらビールやらカクテルやらを出すドリンク・カウンターのみなのだが、このパーティは午前中からである上、未成年の参加者もいることから、各種ジュース、コーヒ、紅茶、牛乳、青汁などをお客様に提供するソフトドリンク・カウンターも別に設置されている。

目を引くコングが「ちよっくら牛乳飲んでくるぜ」とカウンターの方向に向かってからというものの、フェイスマンは微妙に俯いていた。顔が見えないように。加えて、自分の写真が見えないように。

「お前さんのためのパーティなんですかね？」

壁面に並んだ写真を見渡し、ハンニバルが尋ねる。

「知らないよ。エヴェレットさんとこで写真のモデルやっただけだよ、それが何でか、ここに飾ってあるんだ。」

「お前、人前でバスタブに浸かったのか？」

「……ノーコメント。思い出したくもない。」

そうやって話しながら進んでいく二人に、周囲からちらちらと視線が投げかけられる。そして、口々に「テンピーだ」と囁かれている。

「テンピー？」

ハンニバルがフェイスマンに尋ねた。

「テンピー？」

フェイスマンもハンニバルに尋ねた。
と、その時。

「ああ、よかった、フェイス、間に合ったのね、って間に合っていないわ。」
マリアンがフェイスマンの腕をむんずと掴んだ。

「さあ、こっちにきて。」
引っ張られていくフェイスマン。

「あ、ちょっと、マリアン、何なの、何？」
ハンニバルはフェイスマンにひらひらと手を振ると、ローストビーフの方へと直進していった。

「そのキモノ、ビューティフルじゃん。すんごく似合ってる。そのカンザシも、いい細工だし。」
「ありがとうございます！」

顔を真っ赤にしてハナコは喜んだ。着物を褒めてくれる人は過去にもいたけれど、簪まで褒めてくれる人は彼が初めてだ。

「あの、あなたのために特別なお料理を用意したんです。召し上がっていただけませんか？」

「もしかして、さっきから微かに漂ってるこの美味そうない？」

「ええ、ええ！こちらへ！」

ハナコさんはマードックを肅敬発酵食品の前に導いた。「ここに置いたつけ？」と探す必要もなく、それら料理の前にはぼっかりと立入禁止区域が出来上がっていた。別にロープで囲ってあるわけでもないのに、そこだけが真空空間になっている。

「おお、クサヤだよ、これ。」

早速マードックが開いた干し魚を発見して尋ねた。

「そうです、八丈島のトビウオのものです。お気に召して下さったのなら、早速ホテルの者に焼かせましょう。」

「いやいや、クサヤは七輪で焼かなきゃ。うち（病院）に七輪あつからさ、持って帰って後で焼いて食べよ。」

「それはいい考えですね。やはりお魚は七輪で焼くのが最高です。炭は備長炭で。」

「そうそう！さっすがわかってるね。」

「無論です。さて次にこちらは、シュールストレミングです。」

紹介しながら缶をキコキコと開け、持参した箸で醗酵した魚を皿に出すハナコさん。その間に、マードックは横の袋の中に手をつっ込んで、キビヤックのアパリアス（海ツバメ）を取り出した。

「これ、キビヤックじゃん。こんな珍しいの食っているの？」

「どうぞどうぞ。」

アパリアスの肛門を口に当て、手で搾りながらチュウツと吸う。アザラシの皮に包まれて三年間、氷の中でじつくりと醗酵させられた海ツバメの内臓が、いい頃合いに融けていて、口の中にほんのり冷たく、美味い。

「くっは、美味え。」

「ホンオ・フェもお取りしておきますね。」

と、ハナコさんはシュールストレミングの横に、醗酵したエイの刺身も並べた。皿の縁にコチュジャンを盛る。見た目は綺麗であるが、やはり常人には臭い。でも、ホンオ・フェはアンモニアの臭いなので、ツーンと刺激的なだけで、他の臭いに比べれば爽やかである。

アパリアスの羽根を筆で肉を食べ、頭を割って脳味噌まで吸ったマードックは、赤黒い血（と醗酵した内臓と肉）でベトベトになった手で、ハナコさんから皿を受け取った。箸を器用に操って、今にも崩れそうな魚肉を口に放り込む。

「うお、シュールストレミングも美味え。」

それから、ホンオ・フェにコチュジャンをつけて、モグモグ。噛めば噛むほど味が滲み出てきて、それに伴いアンモニアも滲み出てきて、涙が零れる。

「ホンオも堪んね。国内で世界の珍味が食えるなんて、最高のクリスマスだね！」

「喜んでいただけて幸いです。」

ここに、クサヤが気になっている人物がもう一人。クツワダ氏である。結局、彼はモーニングではなく、ミラー氏の勧めでキモノを着てくることになった。紋付袴ではなく、着流しに十徳羽織だ。なかなか渋い装いだ。周囲からは「チャノユ」だの「ハイク」だの「ワサビ」だのと囁かれている。

真っ白なテーブルクロスを敷いたテーブルの前で、真

っ赤な和装の日本女性と、緑のスーツのマードック氏が談笑している様を見て、「クリスマス・カラーだ」と彼は思ったが、それ以上に、「最近、焼き魚を食べてないなあ」と思った。

「あれ、マードックさんの彼女でしょうかね？」

クツワダの視線の先に目を向けたミラーが、チキンを飲み込んでから言った。今はちゃんと眼鏡をかけているので見えるし、いくらミラーでも、カメを発見してくれたマードックの顔ぐらいは覚えてる。それに、マードックはミラーの作品の大ファンだし。明日にはマードックの顔も忘れるかもしれないけど。

「さあ、わからんな。」

「結構な美人ですよ。黒髪が綺麗で、色が白くて。」

「君は、ああいう子がタイプなのかい？」

「いえ、別に。キャラとしていい感じだな、と思つて。あのキモノもカラーで描く時には面白そうだし。……ああ、でも、僕、日本も日本人も割と好きなんです。マンガ大国ですしね。」

「そうか、ありがとう。」

「そう言えば、クツワダさんも日本人でしたね。忘れてました。」

指を舐めるミラーに、クツワダは何も言わず、手拭いを差し出した。

その頃、なぜかキムは空港に向かっていた。特に空港に心当たりがあるわけではなく、どこに行けばいいのかわからず適当に車を走らせているうちに、空港へと続く幹線道路に乗ってしまったのだ。

「とにかく早く見つけなくっちゃ、ああもう、パーティー始まつてる時間じゃないのっ。」

キョロキョロと辺りを見回しながら、ハンドルを握り続けるキム。と、そこで目に飛び込んでくる、通行止めの札と制服の男たち。

「検問？　こんなところで？」

キムは、警官の指示通りに車を止めると、運転席の窓を下ろした。

「何なの？」

「済いません、検問やつてます。ご協力下さい。」

「検問？　最近、何かあったかしら？」

「ハイジャック事件に関して関係者を探してるんです。こいつらなんですけど。」

と、差し出された写真には、あの若干若かりし日のハンニバル。そして後姿のコング。だからと言って、キムは彼らを見分けられないわけもなく。だって、キムはミラー氏ではないのだから。

キムの眉間に深い縦皺が寄る。珍しく、ちゃんと考えているようだ。

『警察があの人たちを捜してる？　あの人たちが犯人？　違うわよね、ハイジャックはマザー・グース何ちゃらだったんですものね。てことは……ああ、そうか、マリアンね！　マリアンが警察に依頼したんだわ。』

約十秒の思考でそう結論づけたキムは、につこりと笑顔を作って警官を見た。

「ご苦労さま！　早く見つけて、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルに連れてきてね！　私、一足先に帰ってるから！　よろしくね！」

「へっ？」

面食らう警官。

「じゃ！」

キムは、そう言って窓を閉め、急発進でバックし、タイヤを軋ませてUターンすると、エンジン音もけたたましく来た道を戻っていった。

「ハリウッド・ルーズベルト・ホテル？」

啞然として見送った警官は、それでも会場の名前をメモに取ることを忘れなかった。

「キム見かけませんでしたか？」

オリバーはユリアを伴い、会場内のそこで立食に勤しむマンションの住人たちに声をかけて回っていた。しかし、返事はいづれも「開会前にはいたけど」。どうやら未だキムは戻ってきていないようだ。

「マミー、誰もキム見てないって。」

ステージ袖に待機しているマリアンに報告するオリバー。

「そう、困ったわね。」

マリアンは息子の方を見ずに言った。フェイスマンの

前に立ちほだかりながら。隙あらば逃げ出してハンニバルたちに合流しようとするフェイスマンを、「感動の再会タイム」までここに引き止めておくのが、現在のマリアンの使命だ。そのため、マリアンとフェイスマンはあたかもバスケットボールの試合中のような姿勢。

「じゃあオリバー、今度はジェイソンを見かけなかったかどうか、聞いてきてくれない？」

「わかった。途中でジュース飲んでもいい？」

「ええ、いいわよ。食べたいものがあつたら、大人の人に頼んで取ってもらいなさい。家に帰っても、昼ご飯はありませんからね。」

「うん、わかった！」

オリバーは、再度、ユリアと手を繋いで、人込みの中に潜り込んでいった。

と、その時。

「やっとなつたわよ！」

「やったー！」

「疲れた。」

入口から、ヘトヘトな一団が会場に倒れ込んできた。結局、バスが走行困難になった場所からずっと歩き通してきた、例の深夜バスの乗客たちだ。もうすっかりアル

コールは抜けている。

「誰か、水か何かくれ。」

「腹減った。」

「靴擦れが。」

救いの手を求める彼らに、見知らぬ人々が水を持ってきてあげたり、料理を持ってきてあげたり、絆創膏を靴から出してあげたり。入口付近は避難所のような様相を呈していた。

その中で一際へばつている人物に目を留め、オリバーはマリアンに向かって走つていった。後に続くユリア。

「マミー！　ジェイソン来たよ！」

「ホント？　キムは？」

「まだ。」

「じゃ、キム抜きで進めるわよ。」

「うん。」

「私はこの通り、手が離せないから、誰かにジェイソンを……そうね、アントワネットさんがいいわ。マドモア

ゼルはどうしてる？」

「ええとね、ローストビーフのところでハンニバルおじさんとマスナンさんと一緒に盛り上がった。」

「マドモアゼルに、オペレーションJダッシュ発動、つて伝えて。」

「うん、わかった。」

そしてまた、お子様二名はチョコチョコと消えていったのであった。

ストコドッコイはマードックの姿を見つけて、真空空間の方へとやって来た。この会場内での顔見知り、キンケイド氏とマードックぐらいなので、寂しい思いをしていたストコドッコイであった。案外、寂しがり屋さん？

「ハイ、モンキー。」

と一歩、デンジャラス・ゾーンに足を踏み入れたストコドッコイは、ぐっ、と息を詰まらせた。はつきり言つて、臭い。

「ハ―イ、親分。ロシア料理はどうしたのさ？ それっぽい見かけてねっけど？ 何だっけ、ソロリ？」

「ソロリ。どうもヴォルフとスタングがまだ来てないみたいなんでね。それにしても何よ、この臭いの。」

「世界のヴェリイ・レアな醗酵珍味。美味いよ。こちらのお嬢さん、ハナコちゃんが用意してくれてさ。」

ハナコさんはストコドッコイに向かってお辞儀をした。ストコドッコイもお辞儀を返す。

「ハナコちゃん、彼はねロシアン・マフィアの親分さんなんよ。」

「まあ、マフィア。恐いわ。」

マードックの陰にこそつと隠れるハナコさん。

「いやあ、素人さんには手出ししないから、恐くはないよ。僕の邪魔をする奴は排除するけどね。……あ、あれ、もしかしてキビヤ？」

ストコドッコイはハナコさんに満面の作り笑顔を向けていたかと思うと、くるっと顔をキビヤックの方に向けて尋ねた。

「おっ、通だね、キビヤなんて呼び方。」

「懐かしいなあ、シベリアでよくご馳走になったよ。一

ついただいていい？」

「どうぞ。」

依然としてマードックの陰から、ハナコさんが答える。ストコドッコイは、むんずとアパリアスを掴み出すと、チューツと吸った。

「こりゃあいい具合のキビヤだ！」

夢中になってキビヤックを喰うストコドッコイ。

「オイラももう一丁貰っちゃおうつと。」

「私も一つ、いただきます。」

手や口の周りを赤黒く臭い汁でベトベトにしながらヂューヂューむしゃむしゃする三人。

心なしか、真空空間は先刻よりも一回り大きくなってた。

「了解したわ、オペレーションJダッシュで行くのね。」

オリバーから伝達を受け、マドモアゼル・アントワネットは血をマスナン爺さんに渡した。

「メルシー、オリバー。早速行動を開始するってマリアンに伝えて。」

「ウィ、マドモアゼル！ って言うんだよね。」

「ノンノン、マドモアゼルじゃなくて、マドモアゼル。」

「ウィ、マドモアゼル！」

「セ・ビヤン。」

マリアンの方へ戻っていくオリバーたちの後ろ姿を見送ると、マドモアゼル・アントワネットは殿方たちに何も言わず、颯爽とジェイソンの方に向かっていった。

ゴッ。

頭に衝撃を受け、スタングは目を覚ました。

「ふああああ。……ってえなあ。」

目を半開きにして頭に手をやると、そこには靴が。靴の先には、足が。

「おいヴォルフ、寝る時にや靴脱げ……って、靴で俺の頭、蹴んじゃねえっ！」

がばつと起き上がり、ヴォルフの足を掴むスタング。

「あー済まん済まん、むにゃむにゃ……。」

足を持ち上げられたまま、再度、入眠していくヴォルフ。

「悪いと思ったら、せめて自分で靴を脱げ！」

そう言いながらも、スタングはヴォルフの靴を脱がせてやり、その靴を床にポイッと放った。その時、床にあった何かに靴が当たった。目覚まし時計だ。

「床に時計置くなよ。いつか踏んで壊すぞ。」

しかし、ヴォルフの返事はない。スタングは、ふう、と息をつく、と、ベッドから立ち上がって、時計を拾い、枕元に置いた。現在、時刻は十一時四分。スタングはもう一度、時計を手に持ち、時刻を見た。間違いなく、十一時すぎ。それから、自分の腕時計を見た。同じく十一時すぎ。

「ヴォルフ、起きろ！ もう十一時すぎてるぞ！」

「十一時？ だから何だっつてんだ、十一時なんてまだ朝だろ。」

寝呆けた声で、ヴォルフが返す。

「とにかく起きろ、この低血圧が！」

ヴォルフの腹に、目覚まし時計を投げつける。

「ぐふっ、何すんだ、痛えじゃねえか！」

「俺たち、十時からのパーティにちよつと遅刻してロシア料理を持ってかなきゃなんねえんだぜ！ 今からロシア料理屋に行つて作らせて、パーティ会場に向かったって、昼すぎるだろ。」

そう、料理は一瞬ではできないのだから。作り置きでもない限りは。

「そうだった、急ごう。」

腹を摩りながら、ヴォルフも起き上がった。

「遅くとも午後一時までに持つてかねえと、セヴェルナヤ・ゼムリヤで氷浸けにされちまわあ。」

「何だ、その午後一時まで、つてのは？」

「昼飯つてのは、普通、午後一時までだろ？」

十一時は「まだ朝」で、昼食は「午後一時まで」。知り合つて結構な年月が経つが、いつまで経つてもヴォルフがルーズなのか几帳面なのかわからないスタングであった。

【つづく】